

第24回夏期福音特別集会（1）

異なる福音

――ガラテヤ書1章～2章10節――

1977年8月19日（鹿沢）

小池辰雄

福音の挽回 聖書はドラマ 圧倒降参 エホバの僕 此岸即彼岸 十字架の門 隠れたる福音
愛の音信 自分を抜け出る キリストの贖罪 信仰は自由 今ここに於て我に向かって キリ
スト即恩恵 御霊の自由 言行一如 三重の内接円の世界 祈り

【ガラテヤ1】

1 人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ、² 及び我と偕にある凡ての兄弟、書をガラテヤの諸教会に贈る。³ 願くは、我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。⁴ 主は我らの父なる神の御意に随いて、我らを今の悪しき世より救い出さんとて、己が身を我らの罪のために与えたまえり。⁵ 願くは栄光、世々限りなく神にあらん事を。アアメン。

6 我は汝らが斯くも速かにキリストの恩恵をもて召し給いし者より離れて異なる福音に移りゆくを怪しむ。⁷ 此は福音と言うべき者にあらず、ただ或る人々が汝らを擾してキリストの福音を変えんとするなり。⁸ されど我等にもせよ、天よりの御使にもせよ、我らのかつて宣べ伝えたる所に背きたる福音を汝らに宣べ伝うる者あらば詛わるべし。⁹ われら前に言いし如く、今また言わん、汝らの受けし所に背きたる福音を宣べ伝うる者あらば、詛わるべし。¹⁰ 我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、そもそもまた人を喜ばせんことを求むるか。もし我なお人を喜ばせおらば、キリストの僕にあらず。

11 兄弟よ、われ汝らに示す、わが伝えたる福音は、人に由れるものにあらず。¹² 我は人より之を受けず、また教えられず、ただイエス・キリストの黙示に由れるなり。¹³ 我がユダヤ教に於ける曩の日の挙動は、なんじら既に聞けり、即ち烈しく神の教会を責め、かつ暴したり。¹⁴ 又わが国人のうち、我と同じ年輩なる多くの者にも勝りてユダヤ教に進み、わが先祖たちの言い伝えに對して甚だ熱心なりき。¹⁵ 然れど母の胎を出でしより我を選び別ち、その恩恵



をもて召し給える者、¹⁶御子をわが内に顕して其の福音を異邦人に宣べ伝えしむるを可しとし給える時、われ直ちに血肉と謀らず、¹⁷我より前に使徒となりし人々に逢わんとてエルサレムにも上らず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返れり。

¹⁸その後三年を歴てケパを尋ねんとエルサレムに上り、十五日の間かれと偕に留まりしが、¹⁹主の兄弟ヤコブのほかいずれの使徒にも逢わざりき。²⁰(ここに書きおくる事は、視よ神の前にて偽らざるなり)²¹その後シリヤ、キリキヤの地方に往けり。²²キリストにあるユダヤの諸教会は我が顔を知らざりしかど、²³ただ人々の『われらを前に責めし者、かつて暴したる信仰の道を今は伝う』というを聞き、²⁴わが事によりて神を崇めたり。

【ガラテヤ2】

¹その後十四年を歴てバルナバと共に、テトスをも連れて、復エルサレムに上れり。²我が上りしは黙示に因りてなり。斯て異邦人の中に宣ぶる福音を彼らに告げ、また名ある者どもに私かに告げたり、これは我が走ることに又すでに走りしことの空しからざらん為なり。³而して我と偕なるギリシヤ人テトスすら割礼を強いられざりき。⁴これ私かに入りたる偽兄弟あるに因りてなり。彼らの忍び入りたるは、我らがキリスト・イエスに在りて有てる自由を窺い、且われらを奴隷とせん為なり。⁵然れど福音の真理の汝らの中に留らんために、我ら一時も彼らに譲り従わざりき。⁶然るに、かの名ある者どもより――彼らは如何なる人なるにもせよ、我には関係なし、神は人の外面を取り給わず――実にかの名ある者どもは我に何を加えず、⁷反つてペテロが割礼ある者に対する福音を委ねられたる如く、我が割礼なき者に対する福音を委ねられたるを認め、⁸(ペテロに能力を与えて割礼ある者の使徒となし給いし者は、我にも異邦人のために能力を与え給えり)⁹また我に賜りたる恩恵をさとりて、柱と思わるるヤコブ、ケパ、ヨハネは、交誼の印として我とバルナバとに握手せり。これは我らが異邦人にゆき、彼らが割礼ある者に往かん為なり。¹⁰唯その願うところは我らが貧しき者を顧みんことなり、我も固より此の事を励みて行えり。

●福音の挽回

ガラテヤ書は、キリストの使徒パウロが第二伝道の終り頃、エペソにおいて――エペソから船にのつてエルサレムの方へ帰ってくるんですが――そこで書いたというように、学者が大体想像しているわけです。ということは、あの小アジア半島のガラテヤの諸教会を、既に伝道してあるからですが、そして、彼はいわゆるユダヤ教――自分自身がユダヤ教の



チャンピオンでありましたから——ところが、パウロはこのユダヤ教から抜け出た。そして、キリストの福音の中に入ってきた。

「ユダヤ教ではダメなんだ、キリストの福音はこういうものである」

ということ、伝道して回ったわけです。彼らは一応、受けとった。ところが、またユダヤ教のご連中が巻き返しに入ってきて、そして、せっかくパウロによって蒔かれた種を揺り動かしてしまった。それで、元へだいぶん戻ってしまった現象が起きたので、パウロは奮然として福音の新しい宣明、挽回のために、戦闘的な気持でこのガラテヤの諸教会への書^{ふみ}を書いたわけです。これが「ガラテヤ書」というものです。使徒行伝というと18章の19節以下がこの史的背景であると思われます。

ところで、宗教改革者のマルチン・ルターがやはり宗教改革の雄叫びのテキストとしてこのガラテヤ書を選んだわけです。ルターの「ガラテヤ書註解」というのは素晴らしいものです。「ガラテヤ書註解」と「詩篇註解」と「ローマ書註解」、この三つがルターの聖書註解の中でもっとも輝かしい、著しいものです。ルターの言葉も時々交えてお話しします。それでは、第1章からいきましょう。

「人^{あら}よりに非^よず、人に由^よるにも非^よず、イエス・キリスト及び^{これ}之^{うち}を死人の中より甦^{よみが}えらせ^た給^{たま}いし父なる神に由^よりて使徒となるるパウロ、

非常に著しいのは、

「人^{あら}よりに非^よず、人に由^よるにも非^よず」

という言葉です。

「人からでもなければ、人によったのでもない」

と、ギリシヤ語もそういうような言い方をしています。

お釈迦さんが——東方の宗教界の横綱であるところのお釈迦さん、西方の横綱はキリスト——釈迦如来が、カヤの山から苦行林に籠もって、57日の坐禅を組んだあと、下山して参りました。その朝に、ウバカという仙人に会いました。ウバカが言うのに、

「あんたは心が広く、身体も豊かになったようだね」

と。そうすると、お釈迦さんが大悟した。大いに悟った。

「一切に自分は勝った」

と。一切の勝者。また、一切を悟ってしまった。

「一切の覚者となった」

と。しかもそれは、

「無師独悟」

である。先生はない。ただ独りでもって悟ったんだと。

「自ら最上無上の法を悟った」

と、そう答えたそうであります。さすがに、お釈迦さんです。梵の世界の一切を掌握して



しまった。けれども、パウロはお釈迦さんのように、何か「宇宙の大霊」といったようなことではなかった。これは、そこに書いてあるように、

「イエス・キリスト及び^{これ}之を死人の中より甦^{うち}えらせ給^{たま}いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ」

と、非常にはつきりしているわけです。キリストを死人のうちから甦えらせたところの父なる神。この父神とキリストによつてであつて、人によつたのではない。これはダマスコ途上でパウロは復活のキリストにひっくり返された。使徒行伝の9章、22章、26章で、パウロは三度このことを語っている。甦^{あきら}かなる示しです。甦示です。「黙示録」と言いますが、あれは本当は「甦示」ということです。そういった甦示によつた。キリストに霊撃されたわけです。

●聖書はドラマ

聖書は教えの本ではない。だから、私は「キリスト教」なんて言わない。これはドラマですから。シェイクスピアのドラマもこの聖書一卷にはかなわない。世界中のドラマをもつてきても、聖書一卷にはかなわない。なぜ、かなわないか。文学的にどんな優れたものも、文学をなお超えたところの――霊学、と言いますか――聖書という多次元的な、絶対次元が相対次元に切りかかったきたところの、そして、闇の世界を光の世界に化せんとするところのもの、凄いドラマです。レンブランドが彼の絵を描くときに、必ずどこかに光がある。闇が相当深く書いてあるけれども、「この光が闇に勝つんだ」という、そういう氣持をレンブランドは表しているのではないかと思います。

ヨハネ伝で「世」というときは、「罪の世、闇の世」のことです。罪の世、闇の世を、「義の世、光の世」に変えようとしている、そのドラマです。けれども、本当に変わるか。変わってしまうか。残念ながら、これは変わりそうもない。聖書はまたそのことを言っている。神さまがそんなにしているのに、人間の背きはなんとしようがないか。

もう、20世紀は正直、危機的な現実であります。21世紀が果たして無事にくるか、あと23年だけでも。日本人は「昭和元祿」なんて言っているけれども、そんな呑気なことを言つてたのでは、とんでもないことです。どんなに幸せそうに見えても、それは偽りの幸せです。もう今は、本当のことを言わなければ、しょうがなくなつてきた。

昨日は、私はある人の告別式をしてきた。告別式がまた信仰の戦いであつた。はつきり福音を語ってきました。コリント後書5章の所を読んだ。

「この地上の幕屋、肉体が破れたならば、霊体を着せてください」

という所です。尼さんもいましたよ、いろいろな人が。私はカトリックであろうと、プロテスタントであろうと、無教会であろうと何であろうと、そんなことにこだわっていませんから。本当のことを言うんだから。何の分け隔てもしません。ただ問題は、どの集まり



にも

「本ものがあるか」

ということだけを問いたい。礼拝の形式や、解釈の仕方はどうでもいい。しかし、

「そこに本ものがあるか、異なる福音でないか」

ということだけです。

●圧倒降参

パウロにとつては、キリストは活けるキリストである。

「死人のうちより甦えらせたまいし」

ということをししばしばパウロは言っています。使徒たちは、直弟子たちも、キリストが十字架にかかつて、あとはもう、彼らは失望落胆。キリストは、復活するということを約束しているのに、その言葉も忘れてしまっている。甦りのキリストにでつくわしても、

「これは本当かな？」

なんて、疑ってみたり。パウロは、この復活のキリストに、霊なるキリストにでつくわしましたから、

「誰が何と言おうとも、自分はこれを否定することはできない。それはキリストを

否むこと^いになる」

というわけです。

よく、「神は何処^{いずこ}に」と言う。キリストに來ないで、

「神は何処に」

なんて、いくら探してみたってダメです、いくら考えてみたって、いくら瞑想してみたって。

「我を見し者は父を見しなり、神を見しなり」

と、キリスト自身がはつきり言っておられるんだ。この福音書のキリストに、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネのこのキリストに、また、もっと広く言えば、全聖書に自在に隠在した顕在したもうところのキリストに、聖書においてキリストにでつくわす。マルチン・ルターはそういう角度でこの聖書を読んでいた。

「学問だ、何だ」

と、そんなことではない。人間のいかなる営みも、学問であろうと、芸術であろうと、政治であろうと、経済であろうと、医療であろうと、何であろうと。だから、私は昨日は、告別式の式辞に「天治人療」と書いた。人間を本当に治療するのは天が為す、神さまがなす。エホバの神は

「我は医者なり」

と言われた。人間は、お医者さんは、薬は、ただそのお手伝いをするにすぎない。医者が本当にその自覚を持っているか。



このキリストに来たら、もう文句ないです。そして、福音書のキリストに来たら、それに体当たりしてください。ドラマだから。そうしたら、ひっくり返される。キリストに降参しなければダメだ。キリストに勝てる人はひとりもいませんよ。もう無条件に――キリストは宮本武蔵以上だから――「参りました!」と。キリストは無剣ですよ、剣なんかありはしない。このキリストに

「参りました!」

と言って降参すると、この世界に入れる。まあ、若い人たちは一生懸命でなんだかんだやっているけれども、しまいにはくたびれてしまう。もう、魂の世界はつきりしているんですよ。魂はそれだけの気合でもってぶつかっていかなければ、本当に生きる世界には入れないようにできている。また、人間はどうにもならないやつだから、世界はこのような状態である。だから、万人は救いを要するんです。これはもうはつきりしている。救いの要らない人はひとりもない。それなら、なぜ、宗教の世界に来ないか。キリスト教が嫌いなら、仏教だつていいいよ。第一流の坊さんのものを読んでごらん。

そういうわけで、もう私はたまらんです、正直。ありがたくて。

「ありがたい」

というのは、

「救われたから、ありがたい」

というのではない。何か知らんけれども、圧倒されているから、ありがたいんです。

●エホバの僕

4 主は我らの父なる神の御意に随いて、我らを今の悪しき世より救い出さん

とて、己が身を我らの罪のために与えたまえり。

4節はきわめて大切な節であります。「我らの父なる神」とある。なぜ、キリストは神さまのことを「父」と言うか。人間の相互関係で、縦の関係で、やはり「お父さん」が一番柱になっているでしょ。霊界におけるところの、何とも言えないところの、実在者を全存在で呼びかけるときに、「父」という言葉より他に、キリストには呼びようがなかった。

偶像に、お鬚のお爺さんを描くわけではない。聖書は神さまのことを非常に具体的に表現します。けれども、決して偶像にしない。というのは、我々、具体的な人間に最も具体的な表現をもつて語っているが、しかし、それは霊なる存在である。人格にして霊的な存在である。父神、霊神。父なる神、霊なる神である。

「父なる神の御意に随いて」

とある。絶対に信頼するひとの、その意志に従うというのは、これは僕の姿なんです。

「どうぞ、私の思いではなく、あなたの思うとおりにしてください」

というのが、キリストの祈りの根本の基調であります。イエスもいろいろな事を祈られた



でしょう。しかし、その奥には、いつもこの祈りがある。この祈りを土台として、祈っている。ご利益的な祈りをしているのではない。

「どうぞ、やってください」

と言って、これは傍観しているのでもない。これは挺身ていしんしている。身を挺している。しもべだから。

「どうぞ、お使いください」

と言って、自分を挺たてしている。心で祈っているのではない。身体で祈っている。神さまの言が出ると、直ちに全行動に移るわけです。マルコ伝が「直ちに」という言葉をたくさん使っているが、まさにそうなんです。マルコ伝はキリストの行為面を非常に力強く劇的に展開している。

「エホバの僕」ということ。旧約聖書のイザヤ書です。旧約聖書の最高の、最深の書はイザヤ書であります。旧約聖書から一卷を選べと言われたら、私は文句なしにイザヤ書を選ぶ。詩篇はこっち側からの祈りだけれども、イザヤ書は上から来ている言葉、本願の言葉だから。イザヤ書全66章、聖書全66巻。まるで聖書を代表しているようだ。まずこんな預言者がいたかと思う。大体、三人の預言者が相継いで書いているわけですけども。

イザヤ書42章をちよつと開きましようか。

「わが扶たすくるわが僕わが心よろこぶわが撰えらび人を見よ。我わが霊みたまをかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。

「教いえを」ではなくて、これは「道を示す」とまず書いてある。

2 かれは叫ぶことなく声をあげることなくその声を街頭ちまたにきこえしめず。3 また傷める蘆あしをおることなく、ほのくらき燈火ともしびをけすことなく、真理まことをもて道をしめさん。

素晴らしい言葉だね。何でも叫ぶことがいいのではない。この言葉は非常に深い愛をもった調子です。

4 かれは衰えずして喪胆きおちせずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言おしえをまちのぞむべし。」「(イザヤ42・1～4)

「その言うところを待ち望んでいる」と。「道、道、道」と言っている。

「我は道なり」

とキリストは言われた。これはひよつとすると、キリストはイザヤ書42章からパツと思われたかも知れない。「エホバの僕」は、キリストは自分を「神の僕」として自覚しておられたから。もちろん、「神の子」ですよ。本質としては、神の子、神の独子ひとりごです。これは本質の問題。こちらは使命の問題。使命は神の御意を行ずる者が、即ちキリストなんだ。子は存在であり、僕は使命を表している。

「エホバの僕(エベッド ヤーヴェー)の歌」というのは、



イザヤ書49章1～6節、
イザヤ書50章4～9節、
イザヤ書52章13節～53章12節、

特に53章は大事なところですよ。これはもうクライマックスです。まるでキリストの預言みたいなところですよ。パウロは、僕としての自覚を書簡の中でよく言っています。

●此岸即彼岸

4 主は我らの父なる神の御意に随みこころしたがいて、我らを今の悪あしき世より救いい出さん
とて、己おのが身を我らの罪のために与えたまえり。

「今の悪しき世より」

とある。

「ははあ、今から二千年前の『今』ですか」

なんて思っただけです。聖書は常に我々の現実ですから。この今の世です。パウロの居た「今の世」よりもっと、今の世は悪い。過去も現在も未来も、この現世はみな「悪しき世」です。マルチン・ルターはガラテヤ書の註解の中で、

「現世が手放して人間的に最もよいと思われる時は、最も悪い」

と言っている。さすがにルターだね、大胆にそう言っている。

「人間は神を抜きにして「今が最もいい」なんて思っている時は一番悪い時だ」

と。

「世より救い出さん」

とある。出現世である。この現世から救い出す、救出する。私たちを出現世せしめんとする。出現世するとはどういうことかというところ、この現世にいなながら常に天国に置いてしまうということです。現世において生きながら天国人とするということですよ。楽しいね、これは。現世からして、彼岸人としてしまう。此岸しを即ち彼岸ひとしてしまう。此岸即彼岸となる。

「相対界に在りながら絶対界を生きているような人にするぞ」

という。私はそうですよ。そういうことをはつきり言えるようにならなければダメなんです。

「そうですか、小池先生は偉いですね」

なんて。私は、偉くはないんだ。偉くはないから、言えるんです。キリストが偉いから。キリストが私を圧倒するから、「ありがたい」といって、言えるんです。

「俺は少し霊的になつて、言えるようになった」

なんて、そうではありません。取り違えては困るよ。

「己が身を我らの罪のために与えたまえり」

とある。大事な言葉がたくさん出てくる。

「この世は罪の世だ」



とさつき言った。「罪」とは、神さまと直結できないことです。神を神としないことなんです。神を神として対することのできないのが「罪」なんです。自分の幸福のために、御利益ごりやくのために拝んだって、それは本当に拝んでいるのでも何でもない。それは宗教的な本当は罪なんだ。ルターも言っている。

「人は神を求めているときも、実は自己を求めている」

と言った。即ち、自分の救われんことを求めている。え？ これは困ったね。

「自分の救われることを求めることが悪かったら、どうしましょうか？」

ということになるね。まあ、いいです、始めは自分の救いを求めて結構です。

「求めよ、さらば与えられん」

というから。

「何とかしてください」

と、パウロも求めたんだ。けれども、「求め」が手放してもつて受けとられない。いっぺんひっくり返される。そうすると、求め以上のものが与えられてくるんです。

即ち、自己が中心になってどんなに求めても、中心が自己である限りは、これは罪なんです。神を神の故に求めるような求めかたになったなら、これは本ものの求め方になる。では、どうしたらいいんですか。

何さま、人間は本能的に自己中心ですからね、エゴイズムです。それはしょうがないんだよ、ある意味において。

「それを罪と言ったって、それはあまり苛酷ではありませんか？」

と言えないこともない。けれども、もう少し違った次元に入ると、

「ああ、それは本当の罪だった。それではどうにもならなかった」

ということが分かる。そのかわり、もうひとつ違う次元に入ったら……(異言)、もの凄いことになる、本当の生命が来たら。

「我らの罪」なんていう言い方をするものだから、

「我らの罪とは一体何でしょうか？」

なんて数えたってダメなんだ。これは「我らという罪」ということだ。

私は聖書をもつと大胆な訳し方をしたいと思うね、みんな躓くから。パウロさんでも、私は読んでいて、時々歯がゆくなってしまう。ギリシヤ的な表現がまじっているからね。パウロはヘブライだけれども、彼はギリシヤの教養もあるものだから。

そこへいくと、仏教の世界にはなかなか凄い表現がある。私はああいうものを使うですよ。道元でも親鸞でも白隠でも日蓮でも何でもみんな、キリストの光に照らしたら、もう全部、楽に読めるようになるから。こんな楽しいことはないね。それでは仏教とキリスト教とごちゃ混ぜにしたかという、決して然らず。



●十字架の門

「己が身を我らの罪のために与えたまえり」

とある。どこで与えたんですか。十字架です。キリスト教会では、教会堂の上に十字架を立ててみたり、礼拝堂の中に十字架があつたり、尼さんが首に十字架をかけてみたり。とにかく、十字架が中心だということだけは分かっている。けれども、本当に十字架が中心になっているでしょうか。また、十字架ということを嫌うようなグループもあるようだ。パウロがこのガラテヤ書の中でも、

「もう十字架の他に何も言うまじと思う」

とまで言っている。無教会は「十字架、十字架」とばかり言っている。今度は、その先に進まない。十字架をこつち側からただ仰いでいる。

十字架は門です。キリストは「我は門なり」とは、

「我は十字架の門なり」

ということ。「門構えに十」、こういう字はないですよ、これは私が作ったんだから。十字架の門に体当たりして、ぶつ、倒れてから、向こうへ進んでください。そうしたら、その次の世界はもの凄いいことになるから。これが罪の贖いなんです。

「己が身を我らの罪のために与えたまえり」

と、パウロはやんわりとした言い方をしているけれども。

5 願^{ねが}くは栄光、世々限りなく神にあらん事を。アアメン。

6 我は汝らが斯^かくも速^{すみ}かにキリストの恩恵をもて召し給いし者より離れて異なる福音に移りゆくを怪しむ。

●隠れたる福音

今日の主題は『異なる福音』です。ところで、歴史的に言いまして、モーセに「十誡」が、十言^{じっごん}が与えられた。「十誡」と訳している『デバリーム』という字は本当は「十の言」という字です。誡^{いしましめ}命でも何でもありません。

「汝^{わが}我^か面の前に我^{わが}の外何物^{ほか}をも神とすべからず」(出エ20・3)

というのは、

「汝にとつては我が面^{かお}の前には他の神々はあるまじきものぞ」というのが本当の意味です。

「汝^{おのれ}自^{おのれ}己^{おのれ}のために何の偶像をも彫^{きざ}むべからず」(出エ20・4)

は、
「自分のために偶像を刻むまいぞ」ということ。

「汝殺すなかれ」(出エ20・13)



は、

「汝は殺人はしないぞ」

ということ。あれはみんな「なかれ」ではない。「なかれ」という字は別にある。「ロー」という否定詞は「殺人はしない」或は「殺人はしまいぞ」というような言い方です。

「私がお前の神だから、お前は殺人なんかできないはずだ。私はお前を信ずるぞ」

と。神さまの律法は、邦訳を見ると、みんな「……なかれ、……なかれ」と訳してある。

「殺人はしまいぞ」

「姦淫はしまいぞ」

「盗みはしまいぞ」

「偽りの証は立てまいぞ」

「隣りを貪りまいぞ」

ということです。それは神さまは

「私がお前をエジプトを救った恵みの神だから、その神の前にお前はそういうことはしないと私は信ずる」

と。神さまの方から偽りの民に信じかかってきている。

どうですか、親子の関係で、お父さんお母さんが子供を信じなかつたら、どういうことになるんですかね。ただ、「……してはいかん」と、そんなことばかり言っていたら、子供はどういうことになるんですか。

その断定的な、断言的な言い方のあとで、

「してはいかんぞ」

というような戒めは、それは時には出てくるでしょう。しかし、根源はいつもその断定的に相手を信じかかっている。信じられてこそ、信じ返していくことがあるわけですよ。愛せられてこそ、愛していくんですよ。

本来は、神が神であるならば、神さまはするようにしてイスラエルの民を信じかかっていた言葉であつたのを、いわゆる律法というのは、そういう角度を忘れてしまった。そういう角度を忘れて、

「すべき、すべからず」

という命令や禁止として受けとっているのが、律法というものの受けとり方に歴史的になつていく。

それで、一生懸命でそれを拳々服膺ふくようしようとして、

「私たちは本当にそれを実践していますよ」

と言つて威張つていたのがパリサイ人です。パウロもその一人であつた。

「律法の義おきてにつきては責むべきところなしと自分は思つていた」

とピリピ書に書いてある。即ち、律法を本当に守つていふと思つていふことが「律法の義」



というやつです。律法を義ただしく実践していると思っっているのを「律法の義」という。律法の義をなお生かしておいて、そして、キリストをその上にただちよつと着せたような信じかたをユダヤ人がやっていた。これが「異なる福音」である。パウロは、

「そうではない。律法の義を生かしてはダメだ」

と言う。律法は本当は隠れたる福音であつた。「隠れたる福音」という言葉はおそらく私が初めて使ったのではないですか。隠れたる福音を本当に受けとつて、それを露あらわなる福音にしたのがキリストなんです。神さまの信に対するに、信をもつて応えたのはキリスト一人なんだ。神さまの信に対するに信をもつて応えた。これが本当の義人である。モーセの律法の奥をキリストは掘ほんでしまった。そして、キリストはそれを露なる福音にした。ところが、パウロはこの隠れたる福音のことは言わない。外側のいわゆる律法だけを言っている。彼はもともとパリサイ人びとだつたから。

「一生懸命で私はやりました。けれども、そんなやり方は本当ではなかった」

ということに後で気がついたけれども。預言者たちはこの隠れたる福音の精神をかなり取っているわけだ。けれども、キリストほど本当に受けとつてはいない。一体、そんなことを今までに言つた人があるんですかね、私は知らないけれども。私は『無の神学』のところで書きますから。

●愛の音信

そういう「異なる福音」、即ち

「いわゆる「すべしすべからず」というような律法の上に、キリストの音信をプラスアルファしたような、そういったような福音は「異なる福音」でダメだ。それはユダヤ教とほとんど変わりが無い。キリストは全く新しくしたんだ。この律法を乗り越えてしまった。そして、本当に満たすことにしたのがキリストの福音である」

ということをパウロは言わんとしている。いいですね。

でも、パウロは

「律法は聖なるものである」

ということを、もちろんローマ書の中では言っている。神聖なものだと。その時は、律法の根本精神をかなり福音的な角度で見ているんです。けれども、「聖なるもの」ということの中に、或る厳かさおこそは非常にひびくんだけれども、深い信頼の、愛の響きが欠けている。もちろん、旧約聖書の申命記には、愛の音信おとずれは出てますよ。だから、福音はいろいろな意味において実は旧約聖書の中に隠れているんですけれども、それをユダヤ人が読みそこない、取りそこない、行いしそこなっているわけです。それで、ユダヤ教になって、完全に硬化してしまつた。それをぶち破つたのがキリストなんです。隠れたるものの奥をもつと



露^{あらわ}にしたのがキリストなんです。

「殺すなかれ」どころではない。「殺さじ」なんだけれども、それを

「殺すなかれとあるけれども」

とキリストは言っておられる。

「あれは『殺すなかれ』ではない、本当は『殺さじ』と言っているんだ」

と、そこまではキリストはやつぱり仰らないんだ。

「殺すなかれとあるけれども、兄弟を憎むのは殺したと同じだ」

と、キリストはもうひとつ奥の世界の、心の世界を深くえぐっている。そうしたらば、誰がこれに及第することができるか。モーセの十誡に誰も及第できない。みんな落第だ、罪びとだもの。自己本位だから。神の信に対するに信をもつて応えられないんだ。愛に対するに愛をもつて応えられない。

「汝、心を尽くし精神を尽くし思いを尽くして、主なる神を愛すべし」

と、あの言葉の奥に、

「神さまは本当に存在を尽くしてお前たちを愛している」

という言葉が旧約にはないんだ。あそこで出ていない、残念ながら。けれども、

「愛しているから、お前もこの愛に応えろ」

というのが本当の答えなんだ。これはヨハネがその書簡の中で、福音の世界ではそのことをはつきり言っている。

●自分を抜ける

7 此^{これ}は福音と言うべき者にあらず、ただ或る人々が汝^{みだ}らを擾^{めだ}してキリストの福音を変えんとするなり。

「変質させてしまっている。そんなものはとんでもない」と。

8 されど我等にもせよ、天よりの御使^{みつかい}にもせよ、我らのかつて宣^のべ伝えたる所に背^{そむ}きたる福音を汝らに宣^のべ伝^のうる者あらば詛^{のろ}むるべし。

「天よりの御使にもせよ」

と、パウロは言った。御使だつてダメだと。パウロが

「私たちが宣べている」

といつて、「私たち」と言っているけれども、パウロは本当はこれは単数で言っているところなんです。なぜ、パウロはこんなに自信があるかというと、いわゆる自信がないから、本当の自信をキリストからもらっているからです。キリストの他^た信^{しん}をもらっている。もう、キリストの示しにあずかっているから、しょうがないんだ。

キリストにひっくり返されて、

「お前は間違っている。なぜ、私を迫害するか」



と、すっかりぶつ倒されてしまつて、三日三晩、目が見えずものが言えず。アナニヤからあんしゅ按手されて、

「我が目よりうづし鱗の如きもの落ちたり。俺は今まで一体何をやってきたか」と。

9 われらのう前に言いし如く、今また言わん、汝らの受けし所に背きたる福音を宣べ伝うる者あらば、のろ詛わるべし。

と言っている。この「詛わるべし」という言い方はもの凄い言葉だよ。地獄行きだというわけだ。パウロ自身が本当は呪われた存在だったんだ。

これを間違えては困るですよ。キリストが、

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん。門を叩け、さらば

開かれん」

と言われた。何を求めるんですか。神・キリストを求める。自分を求めるのではない。

「自分を抜け出ろ」

と言うんです。本当に求めるためには、自分を抜け出なければ、本当の求めはできない。自分を立てて求めている者は結局、自己を求めている。そういう求めかたは相手を、キリストを求めているようで、実は自己を求めている。キリストを求めているのなら、キリストの中に自分が消えてなければいかん。自分が消えてしまっている。

それでは、どうするかというと、自分自身をキリストの中に投げ入れること、投入すること、投身することです。これが本当の求めなんです。サウロ(パウロ)という人間は自分というものがまず立っていて、そして、

「俺はこの律法を一生懸命で満ちたそう」

として、満ちたつもりでいる。これは自分が立っている。

「我こそは律法の義人である」

と思っている。

律法とは何ですか。神さまから離れてしまつて、神さまの言であるという。神さまからの言の、言葉だけを金科玉条にして、神さまをそっちのけにして、これを一生懸命で「俺は守った」と言つて、自分を自己義認している。己を義と認めている。なにも神さまを本当に求めてはいない。神さまの御意に本当に従っているのも何でもない。これが即ち、パウロが間違えていたところの「律法の義」というやつだった。神における義ではなかった。律法の義だった。キリストは神における義なんだ。

だから、自分を本当に投げ入れていくと、自分が消えるよ、この中で。キリストの中にいれば霊的变化を起こす。



●キリストの贖罪

ところが、今度は我々の現実のいろいろな問題です。他のいろいろな、カトリックやプロテスタントやいろいろな集会がある。私はそれを批判しようとは思わない。けれども、パウロが言うような「異なる福音」になつては困るから。パウロが一番、福音の中心としているものは4節の、

「主は己が身を我らの罪のために与えたまへり」

ということ。罪なる我を贖い取ったんですよ。贖罪と言ったって、「我が罪」ではないですよ、我即罪です。自我中心である我即罪、この我なる罪を贖い取ったものがキリストの十字架である。このキリストの贖罪、ということが土台になっていなかったならば、これから外れると「異なる福音」なんです。まだ、他に要素はありますけれども、一番中心になっているものは、この贖罪ということ。贖罪から離れたなら、異なる福音になる。どんなに、それが霊的であろうと。いや、ある意味において、逆に、霊的であればあるほど恐ろしい。このことは、ルターが面白いことを言っている。

10 我いま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、そもそも
た人を喜ばせんことを求むるか。もし我なお人を喜ばせおらば、キリストの
僕にあらじ。

私たちの存在の一番中心的な在り方は何かというと、

「神―キリスト―我」

という縦の線です。「神―キリスト―我」の縦の線をいい加減にしたら、どんなに善さそうに見えても、それは異なる福音になってしまう。「我々」ではないですよ、これは我です。個ですよ。何といつても、個なんです。よく、教会の方々は、すぐ「コイノニア」を、交わりというようなことを意識なさる。それは悪くはない。大事なことです。けれども、もつと大事なのは、この個一人ということ。一個。この縦の関係の我です。横の我々を喜ばせようとするか、縦の神を喜ばせようとするか。パウロは

「縦の線か、横の線か」

と言っているんです。

キリストは神さまから

「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」

と言われた。キリストがバプテスマのヨハネから洗礼を受けて、水の中に浸つて、水の中から上がって来たら、聖霊が鴿のごとく臨んで来た。その時、天からそういう声が聞こえてきた。キリストがどういう時に、そういう声が聞こえて来たんですか。神さまの前に全くぶつつぶれてしまっている。これは受洗ですから。受洗と言ったって、キリストの受洗は水ではない。水の洗礼は同時に霊の洗礼になっている。御霊のバプテスマです。

神・キリストの前に本当に平伏して、



「私ではないです、あなたです。私はもうどうにもなりません」

と言って、自分を明け渡し、投身し、投入しているような角度。その時に上から

「我汝を悦ぶ」

という声が来るわけです。僕の姿なんです。僕の姿になった時に来るんです。

今は「僕^{しもべ}」というのはいないね、民主主義というのはいみんな平等で。人格は平等だよ、大臣でも乞食でも平等です。同じこと。同じことだけれども、神さまの前には、その人格者が本当によつてぶれていなければ。こういう関係が本当に個々について、神との線が引かれている時に、はじめて個が本当の個なんです。ぶつてぶれたこの関係において、本当の義が立つんです。

「アブラハム、エホバを信す。エホバこれを彼の義となしたまえり」

というのは、神さまに100%に「然り」と言いました時には、己を100%に「否」と言っているんです。自分を100%に否定してかかって、神さまを100%に肯定する。

「神さまは99だけれども、私は1だ」

なんて言っているうちはダメなんだ。神さまは100なんだ、こっちは0^{ゼロ}です。これが本当に僕の姿です。

「汝の意志を為^なさせたまえ」

という時に、神さまに対して、アブラハムがそういう態度になった時に、義とされたという。神さまに全存在をもって

「アーメン！」

と言ったときに、義とされた。「義」という字は正義ではない。この義は全聖書を貫いている。この「義」を忘れてはいかん。

即ち、本当の僕が義人なんです。神さまぬきの民主主義なんていうものは危なくてしょうがない。身勝手主義で、とんでもない。

その時にはじめて、この個が絶対的な個になるんですよ。絶対性をもった個に。この個が何ものとも比較することのできない個になる。ぶつてぶれて、ゼロになったときに。そこが「無即無限無量」の世界なんです。このことは、私が『無の神学』の中で言わなければならぬ一つの事なんです。

神・キリストの前に、こんなもの(自分)は何ですか、一体。本当にぶつてぶれて、こんなもの凄いの来るから。「ぶつてぶれる」と言ったって――私は「ぶつてぶれる」とよく言うけれども――ぶつてぶれるというのは、本当は十字架でぶつてぶれているんだ。

だから、この縦の線をはっきりとつくってくださったのが、実は十字架であった。我々という罪のために自分を与えた。そして、本当に罪無きものにしてくださった。「罪をゆるす」ということは、「罪のゆるし」ということは、

「罪無きものにしてしまった」



ということです。あいかわらず、罪はありますよ。ありますけれども、

「根底において、もうそのことは問題でないとところに置いてしまった」

という。では、そこに何が来るんですかという。

そうしたらば、

「われ汝を悦ぶ」

という。僕の姿になったら、神さまは悦ぶんです。我々がキリストの僕に、パウロと同じようにキリストの僕となったら。どうですか、キリストの僕となつたこのパウロが、あらゆる艱難を突破したではないですか。その力はどこから来るか。

●信仰は自由

11兄弟よ、われ汝らに示す、わが伝えたる福音は、人に由れるものにあらず。

12我は人より之を受けず、また教えられず、ただイエス・キリストの黙示に

由れるなり。

「黙示」とは「顕示」です。聖霊の働きによつたんです。キリストの霊に撃たれて、アナニヤを通して聖霊のバプテスマを受けた。使徒行伝9章をまず読んでください。

我々の福音が何かすさまじいものだからね――人間的に「すさまじい」なんて言っているのではないですよ――或る二人の姉妹のお父さんは

「あんな気狂いみたいな宗教は、お前たちは信じてはいかん」

と言って、この集会に来ることを許さない。今朝、その姉妹から電話がかかってきた。

「信仰は自由である。あなた方はお父さんとそこはつきりと戦わなければだめだ。

キリストは何と言っているか。『我よりも父母を愛するものは我にふさわしからず』

と言っている」

と。私はよっぽど父親を電話口に呼んで、一席やろうと思つたけれども、まあそれはやめたけれどもね。

「お前たちは人々に憎まれるぞ。わが名のゆえに、すべての人に憎まれる」

とキリストは言つた。どう思われても、私は痛くも痒くもなくなつてしまつたよ、正直。いろいろな事を言う人が可哀相だよ。もう、そういう相対的な争いの次元からぬけてしまつてゐるから。天下無敵というのは、敵が本当じゃない。相手にするものが無いんですよ、もうひとつ次元が違うから。何かえらそうな言い方だが、本当なんだ。

「敵を愛せよ」

「はい、愛せます」

と。ということとは、本当にそのために祈れる。

「可哀相だから何とか……。まだ少しどこかにぶつかつて、頭から火が出たら、あるいは目が覚めるかもしれませんね」



なんて、祈りの中で言うかもしれない。それは本当に愛するからです。私の所から出ていった人がたくさんいる。気の毒だよ。一体、何を聞いていたんだと思う。

「人間小池は破れ器だよ。そんな者を相手にしていたらダメだ。しかし、破れ器の奥に在るものを見損なうな」

と言っている。私は何と言われようと、絶対にキリストを否むわけにいかんです。

そこで、パウロははつきり言ってるよ、自分で。

¹³ 我がユダヤ教に於ける曩^{さき}の日の挙動^{ふるまい}は、なんじら既に聞けり、即ち烈しく神の教会を責め、かつ暴^{あら}したり。

即ち、キリストを信ずるところの人たちを責めて、かつ荒らしたと。正直、そうなんだよ。とっつかまえて、牢屋に入れて、しまいいは殺してしまふようなことをしたんだから。悪いやつだ、パウロは。殺人犯の張本人みたいなんだ。自分で刺しはしなかったけれども。

¹⁴ 又わが国人^{くにびと}のうち、我と同じ年輩なる多くの者^{まさ}にも勝りてユダヤ教に進み、

もう、チャンピオンだったと言う。ガマリエルの弟子が何百人もいたなかで、パウロは筆頭だったんだ。

わが先祖たちの言い伝えに對して甚^{はなは}だ熱心なりき。

旧約的に熱心である。言い伝えに對して、伝承に對して、旧約聖書的な律法的な宗教に對して、「はなはだ熱心であつた」。人間の熱心というのは、

「あのクリスチャンは熱心なクリスチャンだ」

なんて、その「熱心」なんてのはあぶないぞ。人間的に熱っぽいのはダメですよ。私は今、熱が来ますが、それは私が自分で熱っぽいのではない。上から来ている。語っているうちに、上から来るんです。人間の熱心ではない。

●今ここに於て我に向かつて

パウロは一生懸命で自分の熱心でやった。律法を一生懸命で。マルチン・ルターが修道僧の時もそうだった。一生懸命でやった。けれども、どうしても神さまの律法を守ることができない。神さまの前に本当にどうしたら私は義人となるかと、彼は一生懸命でやった。その熱心は一応、いいんだよ。けれども、熱心の角度が違っていた。どうにもならない。ルターも

「ああ、我れ悩める人なるかな」

だった。それで、独房でぶっ倒れてしまった。どうしても、自分は神さまの前に義^{ただ}しくありえない。なるほど、外側は模範僧だ。模範僧だけれども、心は本当は喜んでいない。自分に咎打ってやっている。外側は、見えた所は立派そうでもダメなんだと。ルターは本当に良心をもって考えた。ルターの宗教を「良心宗教」だと言うのもそこにある。ただし、良心だけではダメですけれども。それでぶっ倒れてしまった。シュタウピッツから、



「お前は、キリストが十字架で人々の罪を贖ったことは信じているだろう。けれども、お前の罪を贖ったことを本当に受けとっているか」

と言われて、この言葉がルターに強く響いた。

「汝の罪を贖った」

と。問題は、みな一人称・現在に響いてこなくてはいいかん。明日でも、次の日でもない。

「今ここに於て我に向かつて」

というのがこの福音の世界です。一騎打ちなんだ。そこでぶっ倒れると、今度は本当に立たせられる。いい加減な世界ではないから。

そのかわり今度は、そうしたらもう何をやっても、私は疲れない。

「お疲れさま」

なんて言われると、私は困るよ。私は疲れないから、本当に。眠くはなるよ。眠くはなるから、寝たりする。けれども、私は負け惜しみが強いわけではないけれども、正直、疲れないものね、上から力が来てしまうから。水泳で五百メートルも泳げば、それは肉体的な疲れはちよつと来るけれども、存在としての疲れは来ないんだ。

「ああ、もう嫌やになつた」

なんて、そんなことはない。あの妙な歌があるね(笑)。ああいうのをテレビでやるから、みんなおかしいことになる。全く、日本人というのはおかしいよな。だから、

「はなはだ熱心であつた」

というのは、大間違い。自己中心の熱心はダメです。自分の熱心から抜けなくては。まあ、始めは熱心でもいいよ。そいつが切り替わらなくてはいいかん、ぶっ倒されて。パウロはぶっ倒されて、今度は、キリストの熱心が、神の熱心が彼の中に入ってきた。それは聖霊なんです。聖霊が入ってくると、これはもう、聖霊は他のものとはかえられませんから。これは体験しなければ言えない。聖霊について語る人はありますけれども、その中から語る人は本当に少ない。私は中から語らざるを得ないと言っているわけです。

●キリスト即恩恵

¹⁵然れど母の胎^{たい}を出でしより我を選び別ち、その恩恵をもて召し給える者、

「恩恵」という字は「キリスト」と言い換えてくださいよ。キリスト即恩恵ですから。キリストが恩恵そのものなんです。

「どういとお恵みがきました」

なんてやっているね。それはキリストという恵みの枝葉にすぎない。キリストという恵みの根っこをいただかなかつたら、キリストそのものをいただかなかつたらダメです。

「キリストは天界にいるのに、どうしていただけますか？」

なんて、頭の人はずういいうことを言う。



「キリストは靈界にいらつしやる。どうしてただけですか？」

なんて。キリストは自在に聖靈をもつて、御靈のキリストとして来たもう。それは一人一人に全キリストとして来る。80人いるから80分の1のキリストが来るのではない。百分のキリストが一人一人に入ってくる。葉末の露には満月の影が百分に宿るではないですか。

16 御子をわが内に顕して其の福音を異邦人に宣べ伝えしむるを可しとし給える時、われ直ちに血肉と謀らず、17 我より前に使徒となりし人々に逢わんとてエルサレムにも上らず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返れり。

何しにアラビヤに行つたか。瞑想し祈りに行つた。そして、本当にキリストを受けとつた。そこで、キリストの十字架が本当に彼に受けとられてきた。聖靈と十字架です。

「御子をわが内に顕して」

というのは、正にダマスコ途上において顕れたあの事態。彼の中に本当に御靈となつて顕れたから。この「内に」というのを、学者が何とか妙なことを言っているよ。そんなことではないんです。

18 その後三年を歴てケパを尋ねんとエルサレムに上り、十五日の間かれと偕に留まりしが、19 主の兄弟ヤコブのほかいずれの使徒にも逢わざりき。20 (ここに書きおくる事は、視よ神の前にて偽らざるなり) 21 その後シリヤ、キリキヤの地方に往けり。22 キリストにあるユダヤの諸教会は我が顔を知らざりしかど、23 ただ人々の『われらを前に責めし者、かつて暴したる信仰の道を今は伝う』というを聞き、24 わが事によりて神を崇めたり。

●御靈の自由

ガラテヤ書2章です。

1その後十四年を歴てバルナバと共に、テトスをも連れて、^{また}エルサレムに上れり。2我が上りしは黙示に因りてなり。斯て異邦人の中に宣ぶる福音を彼らに告げ、また名ある者どもに私かに告げたり、

「名ある者ども」というのはヤコブ、ペテロ、ヨハネの連中のことです。キリストの直弟子たちです。

これは我が走ること、又すでに走りしことの空しからざらん為なり。

誤解がないようにしようと思つたわけです。

3而して我と偕なるギリシヤ人テトスすら割礼を強いられざりき。4これ私かに入りたる偽兄弟あるに因りてなり。

「偽兄弟」とは、ユダヤ的ないわゆる表面上のクリスチャンです。

彼らの忍び入りたるは、我らがキリスト・イエスに在りて有てる自由を窺い、且われらを奴隷とせん為なり。



「キリスト・イエスに在りて有てる自由」とは、

「キリスト・イエスに在りて有てる御霊の自由」

です。

⁵然れど福音の真理の汝らの中に留らんために、我ら一時も彼らに譲り従わざりき。

絶対にそこでは譲らなかつたというわけです。

⁶然るに、かの名ある者どもより――彼らは如何なる人なるにもせよ、我には関係なし、神は人の外面を取り給わず――⁷實にかの名ある者どもは我に何を加えず、⁷反つてペテロが割礼ある者に対する福音を委ねられたる如く、我が割礼なき者に対する福音を委ねられたるを認め、

即ち、ペテロはユダヤ人への伝道を使命とするが、自分は他の国民の人たちへの伝道者とされる。

⁸(ペテロに能力を与えて割礼ある者の使徒となし給いし者は、我にも異邦人のために能力を与え給えり)

「能力」とは御霊の「エネルギー」です。御霊は力を持っていますから。その力は人を救い上げる力です。人を倒す力ではない。

⁹また我に賜りたる恩恵をさとりて、柱と思わるるヤコブ、ケパ、ヨハネは、交誼の印として我とバルナバとに握手せり。これは我らが異邦人にゆき、彼らが割礼ある者に往かん為なり。¹⁰唯その願うところは我らが貧しき者を顧みんことなり、我も固より此の事を励みて行えり。

「君たちは右に、私たちは左に行く」というわけで、それぞれ使命を受ける。即ち、パウロはギリシヤ語もできるし、教養がありますから、パウロはどうしてもギリシヤの世界の方へ向かつていくわけです。当時の世界語がコイネーギリシヤ語ですからね。

●言行一如

8節に、「能力を与えて」ということが書いてある。パウロが、

「神の福音は言葉にあらず、力である」

と言いました。そういうと、すぐ、言葉と力を分ける人がある。困るよ、すぐ、言葉の上つつらで解釈するから。口に出ては言葉となり、手足に出ては行為となる。どっちにも力があるんです。けれども、

「いわゆる言葉ではないよ、本当の力だよ」

ということのパウロが言おうとしている。言葉にも力がある。行為にも力がある。口に発すれば言葉となり、手足に発すれば行となるのであって、これは言行一如なんです。現れるところが違っているだけのなし。



「言うは易く、行うは難し」

なんていう、そんなことではない。もともと、力ある御霊なんです。

「わが言は霊なり、生命なり」

とキリストが言われた。これは

「霊なり生命なり力なり」

という言葉です。だから、使徒行伝のペテロやパウロを見てくらんなさい。跛者に

「立て!」

と言えば、立ってしまったではないですか。言葉に本当の力があつたではないですか。神の霊は本当に、生命をもった力です。

ここにいろいろな方がいらつしゃいます。お母さんもいらつしゃれば、小さなお子さんもあれば、学生もいれば、世の中の大人の方もある。何をしても、どういうことをしていても、そこに本当に力が入ってきますから。

だから、文化文明のさまざまな行為、人間の、政治でも経済でも何でも、その一番元となる人間そのものに、この御霊が来なかったならば、本当の力はない。これははつきりしているんだ。キリストに現れた神をぬきにして、何ができるか。

「我によらずは何ごとも為しあたわず」

とキリストがヨハネ伝14、15章でもつて言っておられる。

「しかし、我によれば何でもできるぞ」

と、今度は逆に言うんだ。

「何でもできる」

ということとは、

「その人に与えられていることは何でもできる」

ということですよ。人間は万能ではありませんよ。その人に与えられているところの事、それは何でもできる。

「何でもできる」

と言ったって、私に

「絵を書け」

と言ったって書けない。画家でなければ書けない。画家の絵に本当に力が入ってくるためには、御霊がこなければダメなんだ。何でもそうですよ。学生諸君なら、勉強に力が入ってくる。

「そろそろ大学受験なので、この集会に来ると勉強が三日損する」

なんて、何をぬかすか。本当の力が入れば、日数なんか問題じゃない。

みんな、私を本当に信ずることができないんだね、私が何をもっているか分からないものだから。



「小池なんてのは大したことはない」

と。私自身は大したことはないよ、けれども、私の中にあるものは大したものなんだ。これを大したものと言わなかったなら、私はキリストを否むことになる。自分はぬけているんですから。自分をぬけないで、どうして私に力がきますか。

●三重の内接円の世界

皆さんも、今、聞いていて、何かしらんが、坐ってられないような気持ではないんですか。飛び上がってしまったもいいですよ、自然に。こないだ私は祈っていて、飛び上がってしまった。そうしたら、お隣の人その霊に感じて、また新しくコンバージョンを起こしてしまった。マッチはすると、パツと火が出る。それから、静かに燃える。あのパツと火が出て、誰が驚きますか。驚かない。人間の魂が本当の世界に入るときは、外から見たら、気違いに見えるかも知れないよ。けれども、それから後の本当の世界に入るためには、そんなことで驚いたり、自分でおかしいと思ったりしているうちはダメなんだ。

パウロがひっくり返されたではないですか。使徒行伝をよく読んでごらんさいよ。パウロはキリストからひっくり返されて、本当にそれでぶっ倒れて、どうにもならなくて、今度は目が覚めたら、別人となってしまった。事実が証明している。この一人のパウロがそのようにひっくり返ったら、世界の歴史に新しい本当のエネルギーが入ってきたではないですか。さっき言った一個が本当にキリストを宿したら、驚くべきことになったではないですか。

数が何千人ではないです。あなた方、百人、十人、一、三人だっていいんだよ。私は数なんかに問題にしてやしない。ただ、本ものが一人、本当のパウロ的な福音の受け方を本当にしていけば、それが動かしていく。いい加減なものを幾人つくろうがダメです。だから、皆さん、本ものになってください。

私はカトリックであろうと何であろうと、ひとつも問題にしていません。ただ本ものだけを問題にしている。どの集会にいたっていい。どうせ、人間のすることは相対的なことなんだから。そんなことを「ああだ、こうだ」なんて言ってたって始まらないんだ。

この聖霊のエネルギーをいただく。私たちは、パウロがここに言っているところのこの世界に入る。それは、キリストを受けとることによって、キリストの中に突入することによって。「神・キリスト・我」という三重の円の内接円の世界に入るときに、これが本ものの世界です。この他に本ものはない。

「本ものとは何か？」

と言われると、私はこういう三重の円を一筆書きで書く。

今日はそこまでしておきましょう。



● 祈り

祈ります。

ユダヤ教のパウロをダマスコ途上で捕らえ、「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」と、
本当の愛をもつて撃ちかかって来られたところの主さま。彼はあなたにぶつ倒されました。
己を義としていたからでした。この己の義に死ぬことを、あなたは十字架をもつてはつき
りと示されました。そして、

「本当に、主さま、あなたが義でした」

と、このことに本当にパウロは全存在をもつて叫び、そして僕として平伏し、

「どうぞ、私をお使いください」

と、彼はあなたの霊をいただいて、もの凄い展開を始めました。何たることでしょう。こ
れが本当の福音の真骨頂でございました。

私たちはこの選びの器パウロの、その事態をガラテヤ書を通して学びたく存じておりま
す。今、その第一回を、この僕のふつつかな言葉でしたが、私の言葉以上に、あなたは御
霊をもつて一同に迫って、また、御言をもつて迫ってくださったから、感謝であります。

この鹿沢の山の懷の中に、大自然の中に入れられて。これは、しかしながら、あなたの
懷でした。主さま、あなたのみ懷の中に私たちは入れられて、もはや言うべきところがあ
りません。どうぞ、兄弟姉妹たち一人一人がのびのびきなならない三日間をここに送り、そして、
それぞれ、あなたを賜って、この山を散ずることができるようになり奉ります。

ここに来れなかった兄弟姉妹たちがいます。まことに残念です。しかし、どうぞ、その窮
地において、彼らまた彼女たちが、本当にあなたにしがみついて、この福音を、その極限
情況において逆に受けとることができますように願ひ奉ります。いずこにも、あなたは臨
みたもう。パウロは牢屋に繋がれていても、本当に自由でした。どうぞ、あなたをあなた
の故に求めているところの魂を深く憐れんでください。

また、今日は、いろいろ、みな難路を通してやって来しましたことは、却って、福音であ
りました。どうぞ、兄弟姉妹たちが、一切のことにおいて、汝のおん顧みと、汝の愛と、
汝のみ光をいよいよ受けて、進んで行くことができますように、願ひ奉ります。また、そ
のことの既に成りつつあることを受けとって感謝いたします。一人一人の中に知らず知ら
ずのうちに、本当に御霊の力が来ていることを信じて、御名を讃え奉ります。どうぞ、また、
今晚、あなたのみ懷の中に安らって、明日はまた新しく甦えり、そして、この福音の

「力より力へ、讃美より讃美へ」

と、また前進また前進なさしめたまわんことを願ひ奉ります。

今、尽くしませんけれども、これらの感謝と讃美、祈り、兄弟姉妹たちのそれと共に、
御名により捧げ奉る。アーメン！

